

『マッシュヴダークネス』の徘徊する脅威！

大蜘蛛／ジャイアント・スパイダー



獣たちが我が物顔で世界を跋扈していた頃より、洞穴、深き森林の奥、そして地下に広がるダンジョンは、怪物や捕食者にとって格好の狩り場であった。なかには怪物と捕食者を兼ねる科もある。学名は *Araneae titanica* (アラネアエ・ティタニカ)。だが民衆は、より分かりやすい通り名で、大蜘蛛と呼んでいる。猛毒、鋼の強度の糸、槍のごとき牙で武装した大蜘蛛は、真正面から獲物を狩るだけでなく、不意討ちにも長けている。より悪しきことに、“闇”はなにがしかの力によって、この怪物的な蛛形綱（ちゅけいこう）生物を自在に操ることに成功したのである。

上級戦鬼／ハイ・トロール



戦鬼（トロール）と人喰鬼（オーガ）は、かつてそれぞれの縄張りに留まり、交わる理由などなかった。しかし昏き“闇”の旗の下、この野蛮な2種族はたびたび

交配され、おどろおどろしい新種が誕生した。それがハイ・トロールなのだ。人喰鬼の知性と、戦鬼の耐久力、そして両種族の強靱な腕力と流血への渴望を兼ね備えたハイ・トロールは、“闇”が倒された後も野外に隠れ潜み、永きにわたって生き残ることに成功した。そして悪の権化が舞い戻った今、再び人里へと忍び寄り、狩り、殺し、貪り喰らうであろう。

人喰鬼の魔術師／オーガ・メイジ



その昔、人喰鬼（オーガ）は祖霊（トーテム）魔術に手を染め、いにしえの秘術を野の精霊より引き出すべく、筆舌尽くしがたき手段で信心を示してきた。したがって光もたらず者（ライトブリンガーズ）と“闇”との最初の戦いでは、そんなオーガ・メイジが真っ先に狙い討たることとなった。泥沼の争いになる前に。その後、人喰鬼の精霊信仰は伝統として続いたものの、太古の元素の力を操ることができるのは、この巨獣の中でも一部の才気あふるる者のみ。されど、この警句を忘るることなかれ。「汝ら、この世で精霊と食卓を共にする人喰鬼を恐れよ。さもなくば汝こそが、血まみれで食卓に並ぶこととなろう」

地獄の猟犬／ヘルハウンド



数十年、ヘルハウンドの姿を見かけた者はいなかった。されど“闇”の力が強まりし今、次元障壁は薄くなり、地獄より多くの猟犬が舞い戻ってきたのだ。その咆哮は夜に響き、善良なる人々の魂を恐怖で揺さぶる。しかし真に恐るべきは、炎で爛々と輝く瞳が狙いを定めた瞬間だ。どれだけ隠そうとも、やつらは獲物の心の弱さを感じ取る。青銅のごとく頑健な肉体と、纏わりつかせた不浄なる業火で、相手を引き裂き、肉を焼き焦がし、その奥で黒く苦く縮こまった心臓をむさぼり喰らおうとする。

苦痛の女魔リリアーチ（女王リリス）

「そなたに恐ろしくも蠱惑的なものを見せてしんぜよう……」



“闇”自身によって召喚されしリリアーチは、冥界の最奥の陰惨な拷問部屋より生じた、剣と腕と蛇鱗の集合

体だ。またの名を「苦悶の女主人」もしくは「暴虐の女王」。その手の刃物は、冥府の炎で鍛えられた鋼で造られている。その剣技と素早さは世に名高く、太刀合わせできる者などごくわずか。定命者の世界に対する“闇”の計画に与し、苦痛という名の果実を収穫すべく、地の底より這い出てきたのである。

奈落の魔神／アビスアル・デーモン



“闇”といえど、あまたの怪物や手下をまとめ上げるには多くの指揮官が必要だ。なかでも最凶最悪なのが奈落よりの魔神である。悪の権化たるアビスアル・デーモンは、まさしく想像を絶する恐怖そのものだ。真紅の肉体と骨質の角からなる捻じくれた威容には、勇敢で有名なドワーフですら足の震えを止められないほどだ。だが真に恐るべきは、その掌から放たれる鮮やかな紫の獄炎である。それには生物の命の炎そのものを吹き消す力がある。アビスアル・デーモンは“闇”にしか首を垂れない。それ以外の全存在は、その獄炎で燃やすべきただの肉なのである。